



## 日本地球化学会ニュース

No. 238      September 2019

### Contents

学会からのお知らせ .....	2
日本地球惑星科学連合2019年大会報告	
書評 .....	2
『人と自然の環境学』	

## 学会からのお知らせ

### ●日本地球惑星科学連合2019年大会報告

日本地球惑星科学連合大会（以下、連合大会）は、日本地球惑星科学連合（Japan Geoscience Union; JpGU）の年次集会として、その前身である地球惑星科学関連学会合同大会を含めると1990年から開催されている、地球惑星科学に関連する日本最大の学術会議です。今年の連合大会は5月26日（日）から30日（木）までの5日間、千葉県の幕張メッセ国際会議場・展示場と、隣接するホテルで開催されました。開催セッション数は240件、全発表件数は5,028件、全参加者数は8,390名、海外からの参加者は655名であり、いずれも昨年（それぞれ230件、5,001件、7,968名、533名）よりも若干増え、大会規模は安定して成長してきています。これまで通りAGU（アメリカ地球物理学連合）をはじめ、AOGS（アジア-オセアニア地球科学連合）、EGU（欧州地球科学連合）とのジョイントセッションが多数開催されたほか、高校生セッションも5月26日（日）に開催され80件の発表がなされるなど、アウトリーチ活動にも力が入れられていました。地球化学関連のセッションも複数開催され、活発な研究発表とディスカッションが行われました。

日本地球化学会でも例年通りブースを出展し、理事と広報委員の方々にお手伝いいただき、学会員入会の勧誘、ノベルティグッズ（Geochemical Journalの表紙と地球化学会ロゴをデザインしたオリジナルクリアファイル）の配布、学会誌「地球化学」の格安販売や、同じく学会誌のGeochemical Journal収録CDの無料配布、2019年日本地球化学会年会等の研究集会の案内、学会員が著者となっている書籍の割引販売を行いました。また、今年から新たに始められたキャリアサポート企画に参加し、ブースにて進路相談を受け付けました。展示企画訪問のスタンプラリーに当ブースも例年通り参加し、高校生セッションに参加した高校生や、大会参加費無料の大学生をはじめとして、若い参加者がスタンプをもらいに多数訪れました。

上述のとおり連合大会への参加者数は年々増加しており、この大会に対する地球惑星科学関連学会の会員の関心の高まりを表しています。来年はAGUとの二回目の共同開催の、JpGU-AGU Joint Meeting 2020として、今年と同じ会場（幕張メッセ）にて、2020年5月24日（日）から5月28日（木）の開催となります。連合大会は、専門が異なる分野の研究者との交流や接

点を作る絶好の機会です。さらに来年はAGUとの共同開催により1,000人以上の海外からの参加者が見込まれ、海外における国際学会に比肩するほどの国際交流の場になると期待されます。来年も、多くの日本地球化学会会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

以下に今回、日本地球化学会ブースで販売した会員書籍のリストを示します。

著者：能田 成

著書名：デージーワールドと地球システム—The Earth Systemの抄訳と編著者のノートから—

出版社：大阪公立大学共同出版会

著者：寺田健太郎

著書名：絵でわかる宇宙地球科学

出版社：講談社

著者：寺田健太郎

著書名：ねえねえはかせ、月のうさぎは何さいなの？

出版社：大阪大学出版会

著者：横山祐典

著書名：地球46億年気候大変動 炭素循環で読み解く、地球気候の過去・現在・未来

出版社：講談社ブルーバックス

（広報委員会 JpGU 担当 角野浩史、  
広報担当幹事 三村耕一）



## 書評

「人と自然の環境学」

（公益財団法人 日本生命財団編，東京大学出版会，2019年1月発行，256ページ，¥2,600）

本書は日本生命財団による学際的総合研究助成を受けた研究プロジェクトのリーダーたちが、助成後の研究の進展を踏まえてそれぞれの最新の知見を執筆したものをまとめた論文・概説集である。この研究助成は

1996年から始まり、「湖沼の環境改善」,「里地・里山などの二次的自然環境とその維持・保全」,「持続可能な循環型社会」など、環境問題に関わる時々の重要なトピックをテーマに公募されてきた。この研究助成のテーマ設定が日本の環境研究をリードしてきたとも言えるだろう。

14章に及ぶ執筆者の専門は生態学から農学,環境工学,環境経済学に至るまで幅広い分野にわたっている。また個々の章においても基本的には学際的な内容となっている。第I部「いとなみに学ぶ」では、人と自然との関わりの中で豊かになる生物多様性のあり方がテーマとなり、在来知に学びながら日本の生態系の豊かさそこに潜む課題について明らかにされる。第II部「いまを評価する」では、森と川,水と都市など水循環を軸に据えた環境の評価と課題について述べられている。第III部「かわりをデザインする」では、里山の価値に基づく農山村再生がテーマになっている。

どの章もコンパクトながら読み応えがあり、時宜を得た最新の知見のレビューとなっている。本書の中で繰り返し述べられているように、環境問題は歴史的にその中心テーマをダイナミックに変えてきた。現在の世界においては持続可能な世界を作るということであり、SDGs(国連持続可能な開発目標)がその包括的な目標として設定され、その実現に向けた活動が世界全体で取り組まれている。その観点から特に重要と思われる章を紹介したい。

中静透「ブナ林の歴史と人の暮らし」(第2章)は、日本のブナ林の生態と今後の保全の方向性を議論したものである。原生ブナ林は積雪の多い日本海側で更新が進み維持されている。これは雪の圧力に耐えるブナの特性によるという。一方、第二次大戦後は伐採が進みその保護と再生が課題となっている。歴史的にみると八甲田山麓では、林内で牛馬を放牧したり炭焼きをすることで結果としてササ類の繁茂を防ぎブナの二次林が成立していたという。ブナ林というと原生林のイメージが強いが、このように人間の営みの結果として成立していたブナ林があるということは、今後のブナ林の保護・保全に大きな示唆を与えるものとなっている。執筆者は今後の方向としてブナの木材(家具材)

としての利用も行いながら保全していく方策を提言している。

田辺信介「ヒトと生態系の化学汚染」(第8章)は、残留性有機汚染物質POPsによる汚染が世界的に進んでいる現状をレビューしたものである。DDT,PCBs,HCHsなどPOPsは1960年代に先進国で大量に使われて世界に拡散したものと、近年途上国で大量に使用される農薬などを起源とするものとの二つのグループがある。それらのグローバルな物質移動の動態が詳しく研究されている。POPsは大気の流れに乗ってそれらの物質が使用されていない地域にも到達し地球全体で汚染が進んでいる。その実態が野生哺乳類・鳥類・貝類の体内濃度として観測されている。さらには各地の人間の母乳からも検出されて地域的な特徴が把握されているのは、この問題の深刻さを改めて認識させるものとなっている。

小田切徳美「田園回帰と農山村再生」(第9章),寺西俊一「持続可能な農村政策」(第10章)は、いずれも過疎化が進行しこのままでは集落消滅が進む一方の日本の農山村をどのように再生させるかという課題について、日本とオーストリアの双方で確実に地域再生が進んでいる様子が活写されている。第9章では日本において都市に住む若い世代が農山村に移住する田園回帰の動きを解説し、さらに移住者が担い手となる農山村の地域づくりや都市との交流について新しい動きが紹介されている。第10章では日本と同様に山岳地帯を多く抱えるオーストリアで地元住民のリーダーシップと政府による手厚い支援策によって元気な農山村が維持されている様子が描かれている。どちらも都市を含めて持続可能な社会を築くためには農山村が元気に維持されていることが重要であることを改めて認識させる。

このように本書においては現代的な環境問題研究の最前線をその多様性と統合性を強調しながら俯瞰したもので、最前線の研究者への指針になるだけでなく、これから環境研究の世界に入ろうという学生や若手研究者への格好のガイドとなっている。

(名古屋大学環境学研究所 高野雅夫)

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2019年12月頃を予定しています。ニュース原稿は11月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会広報幹事・ニュース担当）

三村耕一

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻

Tel: 052-789-3030; Fax: 052-789-2530

E-mail: news-hp@geochem.jp

平野直人

〒980-8576 仙台市青葉区川内41

東北大学東北アジア研究センター

Tel: 022-795-3618; Fax: 022-795-3618

E-mail: news-hp@geochem.jp